

男性保育者のユーモア行動に関する仮説の生成と検証

中澤 潤¹⁾ 中道圭人²⁾ 永井 保³⁾

¹⁾千葉大学・教育学部 ²⁾東京学芸大学連合大学院教育学研究科・博士課程 ³⁾NTT DoCoMo

Humor behavior of male teacher in day care center : Hypothesis generating and testing.

NAKAZAWA Jun¹⁾ NAKAMICHI Keito²⁾ NAGAI Tamotsu

¹⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan.

²⁾Doctoral Course, The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University, Japan.

³⁾NTT DoCoMo, Inc

保育場面における男性保育者の行動特性をユーモアという視点から明らかにすることを目的とし、観察を行なった。第1観察では男性保育者のユーモア行動についての仮説を生成し、第2観察ではその仮説の検証を行なった。男性保育者は女性保育者よりもユーモア行動を多く用い、特に攻撃的なユーモアを身体的に表出することが多かった。そのユーモア行動は、ネガティブ事象（幼児が不適切な行動を示す；失敗・困難に直面する）が存在する場面において、幼児のネガティブ事象の軽減・解決を促進するために用いられていた。結果は保育における人的環境としての男性保育者の存在意義という観点から論じられた。

Behavior of male and female day care teachers were observed for generating hypothesis of behavioral sex differences. Humor behavior was found as typical difference between male and female teachers. Some hypotheses were generated. Hypothesis testing observation supports following hypotheses: Male teachers used humor behavior in their child care work than female teachers; Male teachers expressed more physical aggressive humor behaviors than female teachers; Male teachers expressed their humor behavior at the situation where child confronted a failure and a difficulty. In such negative situation, male teacher's humor behavior decreased child's negative feeling and support the child's problem solving. These results were discussed from the implication of the role of male teachers in early childhood.

キーワード：男性保育者（male day care teacher） ユーモア行動（humor behavior） 観察（observation）
仮説生成（hypothesis generating） 人的環境（human environments）

問題・目的

幼児は様々な環境との関わりを通して育っていく。この環境の中には“人”，つまり人的な環境も含まれる。幼児の育ちの多様性を保障するために環境もまた多様であることを求められる。つまり、保育現場において幼児にとっての人的環境としての保育士・幼稚園教諭（以下、これらをまとめて保育者）も多様であることを求められる。この人的環境の多様性に関して、本研究では人の根本的な属性の1つである性別という側面、つまり男性保育者・女性保育者という点に注目していく。

まず、男性保育者は保育現場においてどのように認識されているのだろうか。齋藤・木下・仲山・林・吉田・小田・鈴木（1998）は女性保育者を対象とする意識調査から、女性保育者は(1)男性保育者の保育現場への参入に肯定的であり、男性保育者が職場にいる場合にその傾向は高い、(2)男性保育者が在園することは幼児の発達にメリットが多く、それはダイナミックな遊びができる等の“男らしさ”という言葉に代表されるようなカテゴリー

で多い、(3)男性保育者に期待する資質と役割としては、男性性を生かした資質を期待する回答がある一方で、まず保育者としての資質を問うものが多く、保育者としての男女の役割分担は必要ないと答えたものが圧倒的に多いとしている。この結果から、職場での男性保育者の有無により多少の認識の違いはあるが、全体的に女性保育者は男性保育者を肯定的に見ている。また、女性保育者は性役割分担を必要ないと考えつつも、幼児との関わりの中では“ダイナミックな遊び”に代表されるような男性的な特性を期待しているようであり、そのような特性が保育現場において男性が求められる理由の1つといえるだろう。

では、実際に保育を受ける幼児達は男性保育者をどのように認識しているのだろうか。宮本（1993）は幼児の男性保育者・女性保育者に対する認識の違いを明らかにするために、男性保育者のいる幼稚園の園児に対して仮想的な幼児-保育者相互作用場面（幼児が保育者に許可を求める場面、幼児が保育者を遊びに誘う場面）を提示し、その場面での保育者の行動を予測してもらった。この結果、許可を求める場面では女性保育者よりも男性保育者が厳しい対処をする（例えば、給食を残して良いか

どうかを聞くような場面で男性保育者の方が「残してはいけない」という)と認識しており、遊び場面では自分と同性の保育者が遊びに参加してくれると認識していた。また、男児は、男児が女児よりも男性保育者から叱責を受け、女児は、女児が男児よりも男性保育者から賞賛を受けると認知していた。

以上のように、女性保育者や幼児が持つ男性保育者への認識が検討されている。しかし、男性保育者が実際の保育場面でどのような行動をとっているのかは明らかではない。そこで本研究では、実際の保育場面における男性保育者・女性保育者の行動の違いを基に、男性保育者の行動の特性を明らかにすることを目的とする。それを基に、男性保育者のどのような行動がこれら女性保育者や幼児の持つ認識に影響を与えているのかについての示唆を得たい。

具体的には、第1観察で見られた男性保育者・女性保育者の実際の保育場面における行動の違いを基に仮説を生成し、第2観察でその仮説を検証する。

第1観察(仮説生成観察)

[目的]

第1観察では、保育場面において男性保育者・女性保育者にどのような行動に違いがあるのかを探索的に明らかにし、その違いについての仮説生成を行なう。

[方法]

観察対象者

都内A保育所、年中児クラス24名(観察開始時の平均年齢=4:11, 範囲=4:3—5:3)を担当する男性保育者1名(39歳, 保育経験年数12年目, 以下MT1と記述)、女性保育者1名(30歳, 保育経験年数10年目, 以下FT1と記述)。都内B保育所、年長児クラス22名(観察開始時の平均年齢=5:11, 範囲=5:7—6:4)を担当する男性保育者1名(32歳, 保育経験年数10年目, 以下MT2と記述)、女性保育者1名(35歳, 保育経験年数15年目, 以下FT2と記述)。また、以下では男性保育者をMT、女性保育者をFT、男児をMC、女児をFCと記述する。

観察実施時期

2002年7月～11月の期間でMT12回, FT5回, 合計17回の観察を行なった。観察時間は9時～17時(幼児が昼寝をする13～15時を除く)であった。

手続き

MT・FTそれぞれを対象に、保育者が幼児と関わっている場面を中心に自由記述による保育場面の行動観察を行なった。

[結果と考察]

観察記録を基に検討したところ、「ユーモア」がMTに共通して見られ、FTと異なる行動として特徴的なものであると考えられた。そこで本研究では、MTとFTに相違が見られる可能性を持つ、保育場面における保育者のユーモア行動に焦点を当てて事例分析を行なった。

ユーモアの定義

牧野(1997)はユーモアを「送り手が受け手(ときには、送り手自身も含む)を楽しませる目的で作り出した刺激を受け手に伝達し、当事者(送り手かつ／あるいは受け手)がその刺激をおもしろい、おかしいと知覚する一連の過程」としている。本研究ではこの定義を採用し、保育者の行動に焦点を当てて研究を進めていくために、送り手を保育者、受け手を幼児と置き換えて考えることとした。

ユーモア場面の抽出基準と抽出事例数

保育者のユーモア行動場面を抽出するために、以下の点を判断基準とした：(1)保育者がおかしさ、おもしろさを生み出すことを意図して表出した行動、すなわちユーモア行動によって、保育者もしくは幼児が笑っている場面(ゲームなどの形式化された行動や、絵本やお話などの内容から生じたのではない笑いがあること)；(2)笑いが見られなかったとしても明らかに保育者がおかしさやおもしろさを生み出す状況を意図した行動が示されている場面(保育者の示したユーモア行動を幼児が理解できず、その場面に笑いが生起しないような場合)。

ユーモア場面抽出の結果、2人のMT全体で52事例／12回(観察実施数)、2人のFT全体で10事例／5回のユーモア場面が得られた。観察実施1回あたりのユーモア事例数はMT2人の平均では4.3事例、FT2人の平均では2.0事例である。この結果から、次の仮説を生成した。

仮説1「保育場面の中で男性保育者は女性保育者よりもユーモアを用いる。」

FTのユーモア場面がMTに比べて少ない原因は、FTは幼児の遊びを盛り上げるための行動が多く、独立した保育者のユーモア行動でなく遊びの流れの中で幼児に「楽しさ」を与えることを目的とした行動が多いことである。

例えば、事例1は一見、ユーモア場面のように見えるが、FT1の行動は幼児にとって「楽しさ」が喚起されるものであっても、「おかしさ」を感じたり、「おもしろさ」に笑うことはないだろう。今回抽出した場面は、保育者が「おかしさ」、「おもしろさ」を求めユーモア行動を起こした場面であり、幼児の笑いが「遊びの楽しさ」により生じた場面は抽出していない。このために、FT全体のユーモア場面が少ないのであろう。

事例1(FT1)

・近くの公園で散歩。石垣のような場所の上で子ども達は遊んでいる。
MC、石垣の上からFT1に「のぼっといでー！」
FT1:「さあ、上れるでしょうか?!(自分に言い聞かすように)」
傍にいたFCに「一緒にのぼろう!行くよ、せーの!」と言いながら上る。

表1 場面×表出形態別の代表的なユーモア事例

遊び場面	遊戯的ユーモア表出	事例2 (MT1) ・昼食 MT1が芋のてんぷらを食べて「あつつい！あげたてだ。」 それを聞いてMC：「あでたて？」MT1：「うん、アボガド。」
	攻撃的ユーモア表出	事例3 (MT1) ・昼寝の準備。 布団の上に乗っているMCの上にさらに布団をかぶせ、MT1も上に乗る。 そのままMCの首に手を回してプロレスごっこ。 その後、布団の上につぶせでMT1が寝る。MC数名が乗ったりけったりし始める。 MT1、しばらくそのままやらせておく。 急に起きて、その内の一人を捕まえ上からのしかかる。 さらに他のMCを捕まえプロレスごっこ。
からかい場面	攻撃的ユーモア表出	事例4 (MT1) ・外遊びの時間、砂場の近くにMT1はいる。 MT1、MCの帽子を奪う。ポケットに隠す。 そのまま何事もなかったような顔をする。 MC：「俺の帽子がない…。」 MC、MT1の元へ向かい帽子を取り返そうとする。 MC、MT1のポケットを探り「ここにあると思う。」 MT1：「ここにあると思うよ」MCのポケットから帽子を出したふりをする。
	遊戯的ユーモア表出	事例5 (MT1) ※ネガティブ事象に下線 ・朝の部屋遊びの時間。 テーブルでビーズ遊びをするMC。床にビーズがこぼれている。 MT1：「いやいや、小僧、小僧！落ちてるって！」
問題場面	支援的ユーモア表出	事例6 (MT1) ※ネガティブ事象に下線 ・昼食の後、昼寝のために着替える時間。 MCが服を脱いで前後ろ逆に着てしまう。 その日はそのMCの誕生日で服の胸にリボンをつけてもらっていた。 MT1：「あっ！不思議！リボンがなくなってる！」 MC、気がついて服を直す。
	攻撃的ユーモア表出	事例7 (MT2) ※ネガティブ事象に下線 ・公園に向けて保育所を出発。 MT2、きちんと歩かないMCの頭を腕で絞めるようにしてプロレスごっこ。

保育におけるユーモア場面の分類

ユーモア事例を抽出していく中で、ユーモアが産出される場面として以下の3つをあげることができた：〈遊び場面〉（遊び活動における幼児と保育者のやりとり場面）、〈からかい場面〉（保育者が幼児をからかったりして、幼児を困らせたりする場面）、〈問題場面〉（幼児にネガティブ事象（不適切な行動、失敗、困難との直面など）が存在する場面）。〈遊び場面〉・〈からかい場面〉は共に幼児-保育者の関わりの流れの中で生じるが、〈遊び場面〉が幼児・保育者のいずれか、もしくは双方にユーモアによる笑いが見られるような場面であるのに対して、〈からかい場面〉は送り手としての保育者はおもしろさを感じているが、その内容（からかい・うそ）のために笑いを示さず、受け手としての幼児はユーモアを理解できず笑いが生起しないことも多い場面である。また、〈問題場面〉は幼児-保育者の関わりの中というより、幼児側に生じたネガティブ事象に対する保育者からの働きかけによって生じるような場面である。本研究では、この3場面毎のユーモア事例の出現を検討した。

また、本研究では出現したユーモア行動の表出形態を上野（1992）に従って3つに分類した。上野（1992）はユーモア表出形態を次のように分類している：遊戯的ユーモア：駄じゃれ等の言葉遊び、ありふれた日常のエピソード、スラップスティックなど内容自体にはあまりメッセージのないもの；攻撃的ユーモア：風刺、ブラックユーモア、皮肉、過激な刺激・暴力的な刺激、嘲笑・

からかい、自虐；支援的ユーモア：自己客観視、自己洞察を含む刺激、問題を軽く見る刺激。これら場面と表出形態別の代表的なユーモア事例を表1に示す。

事例2・3は〈遊び場面〉に分類されるような場面である。場面としては遊戯的だが、その表出形態には攻撃的な側面もある。

事例4は〈からかい場面〉に分類される場面である。幼児をからかったり、だましたりするユーモアも時折見られた。このようなユーモア行動は、幼児の考え方を広げる、あるいは〈問題場面〉のようにネガティブ事象への耐性を求めるものといえるだろう。

最後に〈問題場面〉に分類される場面を見ていく。事例5・6のように幼児のネガティブ事象に対して、ネガティブ事象をユーモアによって茶化すことで、幼児の動揺や、絶望感を軽減している。また、事例7は本来なら幼児が叱責を受ける場面であるが、ストレートに叱るのではなく、ユーモアを交えて幼児がネガティブ事象をスムーズに解決できるようにしている。

場面×表出形態別の事例数を表2に示す。以下では表2に基づき仮説を生成する。

ユーモア場面 表2の場面合計から、MT全体では44.2%、FT全体では60.0%のユーモア事例が〈問題場面〉に分類された。ユーモアが〈遊び場面〉でなく、励まし・叱責・注意を必要とする〈問題場面〉で多くみられたことは興味深い。そこで次の仮説を生成した。

表2 第1観察における男性保育者・女性保育者別の場面×表出形態の頻度と割合(%)

表出	遊び場面			からかい場面			問題場面			合計		
	遊戯的	支援的	攻撃的	遊戯的	支援的	攻撃的	遊戯的	支援的	攻撃的	遊戯的	支援的	攻撃的
MT1	5 (17.2%)	0 (0.0%)	11 (37.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (10.3%)	1 (3.4%)	3 (10.3%)	6 (20.7%)	6 (20.7%)	3 (10.3%)	20 (69.0%)
MT2	0 (0.0%)	0 (0.0%)	8 (34.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (8.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	13 (56.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	23 (100.0%)
男性保育者の各場面の 表出形態合計	5 (9.6%)	0 (0.0%)	19 (36.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (9.6%)	1 (1.9%)	3 (5.8%)	19 (36.5%)	6 (11.5%)	3 (5.8%)	43 (82.7%)
男性保育者場面合計	24 (46.2%)			5 (9.6%)			23 (44.2%)			52		
FT1	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	2 (40.0%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	2 (40.0%)	2 (40.0%)
FT2	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (60.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
女性保育者の各場面の 表出形態合計	1 (10.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (30.0%)	0 (0.0%)	2 (20.0%)	4 (40.0%)	1 (10.0%)	2 (20.0%)	7 (70.0%)
女性保育者場面合計	1 (10.0%)			3 (30.0%)			6 (60.0%)			10		
保育者場面合計	25 (40.3%)			8 (12.9%)			29 (46.8%)			62		

仮説2「男女を問わず保育者のユーモア行動は励まし、叱責、注意を必要とするような失敗や不適切な行動を幼児が示す〈問題場面〉に多く見られる。」

ユーモア表出形態 表2の表出形態合計から、MT(82.7%)はFT(70.0%)よりも攻撃的ユーモア表出を選択する傾向があるようである。そこで次の仮説を生成した。

仮説3「男性保育者は女性保育者よりも、ユーモア表出形態の中で攻撃的ユーモア表出が多い。」

攻撃的ユーモア表出の内容 攻撃的ユーモア表出の中には「過激な刺激・暴力的な刺激」といった身体的なユーモアと、「ブラックユーモア」、「嘲笑・からかい」のような非身体的なユーモアがあるが、MTは身体的なユーモアを多く表出させているように思われた。そこで本研究では、攻撃的ユーモア表出の中でも過激な刺激・暴力的な刺激を身体によって喚起するユーモアを「身体的ユーモア」、それ以外のものを「非身体的ユーモア」と定義し、分類を行った。その結果、MT(67.4%)がFT(28.6%)よりも身体的ユーモアを多く用いていた。そこで次の仮説を生成した。

仮説4「攻撃的ユーモア表出において、男性保育者は女性保育者よりも身体的ユーモアを多く用いる。」

第2観察(仮説検証観察)

[目的]

第1観察で生成された仮説を検証する。

[方法]

観察対象者

第1観察で観察実施したMT1, MT2, FT1, FT2。さらに仮説の普遍性を高めるために千葉県内C保育所、縦割りクラスの幼児20名(観察開始時の平均年齢=3:10, 範囲=2:6—5:2)を担当する男性保育者1名(23歳, 保育経験年数2年目, 以下MT3と記述)を観察対象者

として加えた。

観察実施時期

2002年8月～12月の期間で各保育者2回ずつ、合計10回の観察を行なった。

手続き

ユーモアに関する幼児・保育者の関わりに注目し、自由記述による観察記録を行なった。さらに、1時間前後のビデオ撮影を同時に実施した。

[結果と考察]

ビデオ映像による観察・分類の信頼性の検証

MT1, FT1について撮影されたビデオ映像の中から観察者が抽出したユーモア場面(8場面)を千葉大学幼児心理学研究室の学生2名に見てもらい、その場面がユーモア事例といえるか否かを判断してもらった。その結果、観察者が抽出したユーモア事例は全てユーモア事例として認められた。また、ユーモア事例8事例について場面・表出形態、および攻撃的ユーモア表出の場合の身体的・非身体的ユーモアの分類を求めたところ、1事例を除いて観察者も含めた3者の分類が一致した。3者が一致しなかった事例については、再度検討を行い、観察者の分類を採用した。ユーモア行動抽出・分類はほぼ観察者と一致しており、本研究におけるユーモア行動抽出・分類は定義に従い観察者自身が進めていくことができるといえる。

ユーモア場面の抽出事例数

観察の結果、3人のMT全体で50事例、2人のFT全体で4事例のユーモア場面が得られた。観察実施1回あたりの事例数はMTでは8.3事例、FTでは1.0事例である。この結果はMT・FT間に大きな違いがあることを示しており、「男性保育者が女性保育者よりもユーモアを多く用いる」という仮説1は支持されたといえる。

表3 第2観察における男性保育者・女性保育者別の場面×表出形態の頻度と割合(%)

表出	遊び場面			からかい場面			問題場面			合計		
	遊戯的	支援的	攻撃的	遊戯的	支援的	攻撃的	遊戯的	支援的	攻撃的	遊戯的	支援的	攻撃的
MT1	2 (22.2%)	0 (0.0%)	2 (22.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (11.1%)	0 (0.0%)	1 (11.1%)	3 (33.3%)	2 (22.2%)	1 (11.1%)	6 (66.6%)
MT2	3 (21.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (7.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	10 (71.4%)	3 (21.4%)	0 (0.0%)	11 (78.6%)
MT3	2 (7.4%)	0 (0.0%)	3 (11.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	14 (51.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	8 (29.6%)	2 (7.4%)	0 (0.0%)	25 (92.6%)
男性保育者の各場面の 表出形態合計	7 (15.7%)	0 (0.0%)	5 (9.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	16 (31.4%)	0 (0.0%)	1 (2.0%)	21 (41.2%)	7 (14.0%)	1 (2.0%)	42 (84.0%)
男性保育者場面合計	12 (24.0%)			16 (32.0%)			22 (44.0%)			50		
FT1	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
FT2	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	3 (75.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)
女性保育者の各場面の 表出形態合計	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	3 (75.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)
女性保育者場面合計	3 (75.0%)			0 (0.0%)			1 (25.0%)			4		
保育者場面合計	15 (27.8%)			16 (29.6%)			23 (42.6%)			54		

保育におけるユーモア場面×表出形態の分類

MT・FTの場面×表出形態別の事例数を表3に示す。ユーモア場面「保育者のユーモア行動は〈問題場面〉に多く見られる」という仮説2を検証するために、表3の保育者場面合計に対して χ^2 検定を行なったところ、有意な差は見られず($\chi^2_{(2)}=2.11$, ns)、仮説2は棄却された。

しかし、性別にみるとMTの〈問題場面〉事例は全体で22事例/50事例(44.0%)となり、その事例数は3場面の中で最も多かった。FTは第1観察では〈問題場面〉事例(60.0%)が最も多かったが、第2観察ではその出現率(25.0%)は低かった。FTはMTよりもユーモア事例自体が少ないため、少数の出現によって割合が大きく変動する。そのことを考えると、FTのユーモア事例出現の安定性は低い可能性がある。仮説2は保育者全体というより、MTに見られる特性なのかもしれない。

ユーモア表出形態 「男性保育者は女性保育者よりも攻撃的ユーモア表出が多い」という仮説3を検証するために、表3に基づいて保育者の性別×表出形態の尤度比検定を行なったところ、有意な差が見られた($\chi^2_{(2)}=6.80$, $p<.05$)。攻撃的ユーモア表出の出現率はMTでは高く、FTでは遊戯的ユーモア表出の出現率が高かった。FTは第1観察では攻撃的ユーモア表出(70.0%)が最も多かったが、第2観察ではその出現率(25.0%)は低かった。ユーモア場面と同様に、FTはユーモア事例自体が少ないために、このような割合の変動が起こったのだろう。これらの結果から、仮説3は支持されたといえるだろう。

攻撃的ユーモア表出の内容 MT全体の攻撃的ユーモア表出42事例中、身体的ユーモアは29事例(69.0%)、非身体的ユーモアは13事例(31.0%)であった。一方、FT全体では攻撃的ユーモア表出は1事例であり、その1事例は非身体的ユーモアであった。「男性保育者は女

性保育者よりも身体的ユーモアを多く用いる」という仮説4を検証するために、保育者の性別×身体的・非身体的ユーモアの尤度比検定を行ったところ、有意な差は見られなかった($\chi^2_{(1)}=2.29$, ns)。しかし、29事例/42事例(69.0%)とMTでは身体的ユーモアを多く用いている。FTの事例数が少なかったため、MT・FTの比較は完全なものとは言い難いが、仮説4は部分的に支持されたといえるだろう。

保育者によるユーモア行動の対象となる幼児の性別

明らかに男児がユーモアの対象となっている事例、明らかに女児がユーモアの対象となっている事例を抽出し、事例数(MT:46事例;FT:2事例)を比較した。対象が不明確な事例(MT:4事例;FT:2事例)は分析から排除した。男児対象のユーモア事例は、保育者全体では38事例(79.2%)であった。一方、女児対象のユーモア事例は、保育者全体で10事例(20.8%)とその出現率は男児よりも非常に低かった。MTでは男児対象が37事例(80.4%)、女児対象が9事例(19.6%)、FTでは男児対象が1事例(50.0%)、女児対象が1事例(50.0%)で、MTのユーモア行動は男児を対象とすることが多かった。

全体的考察

保育者の性別とユーモア

本研究の結果から、男性保育者は女性保育者よりも多くのユーモア行動を用いていた。性別とユーモアの関係についてMcGhee(1999)は、性別によるユーモアの最もはっきりした違いは、男性がしばしばジョークを言う側になるのに対して、女性は一般に反応する側になることであるとし、ユーモアが特定の性役割期待に関係していると論じている。本研究でも、そのような性役割期待

事例8(MT1) ※下線はネガティブ事象
 ・昼食場面。となりのMCにちょっかいを出しているMCがいる。
 MT:「〇〇くん、ちょっとやりすぎだよ。」
 その後、もう一度MT1は注意する。
それでも止めないMC。
 MT1、少し強い口調で「(注意をするのが)3回目だよ！いいかげんにしな！」
 部屋中が一瞬で静かになる。
 MCが驚いた様子をした後で、うつむいて黙り込む。
 FCが小声で「こわーい。」

が男性保育者・女性保育者それぞれの保育におけるユーモア行動の違いに影響を与えていたことは十分に考えられる。

しかし、性役割期待によって男性がユーモア行動を多く使う可能性を持っていたとしても、それが保育場面において男性保育者が幼児を対象にユーモア行動を行なうことの直接的な要因になるわけではない。保育者のユーモア行動の意図と効果を明確にするためには、より詳細にユーモア行動を見ていく必要がある。そこで本研究ではユーモア行動数だけでなく、ユーモア行動を場面(〈遊び場面〉・〈からかい場面〉・〈問題場面〉)と表出形態(遊戯的ユーモア・攻撃的ユーモア・支援的ユーモア)という視点から分類を行なった。

ユーモア行動の意図と効果

場面に関して、第1観察では男性保育者・女性保育者の両者で、また第2観察では男性保育者で〈問題場面〉におけるユーモア事例の出現率が高かった。このことは、幼児が失敗や不適切な行動を示した場合、保育者が励まし・叱責・注意の意図を込めたユーモア行動を多く用いるということを示している。では、〈問題場面〉にユーモアを用いることにはどのような効果があるのだろうか。

事例8は幼児にネガティブ事象が存在しており、〈問題場面〉といえる。男性保育者が強い口調で注意・叱責を行なった場合、事例8に見られるように幼児のネガティブ事象が軽減されることはない。それどころか、周囲の幼児にまでMT1が強い口調で注意をしたことによる緊張感、あるいはストレスが生じている。もちろん、この場合は保育者側がきちんと叱るべきであると判断したからこそユーモア以外の方略をとっているのであるが、男性保育者がユーモアを交えずに幼児をきちんと叱る場面では、幼児が怖がったりすることが多かった。このことは、宮本(1993)において男性保育者は厳しいという認知を幼児が持っていたことにも関わっていると考えられる。

牧野(1997)はユーモアの役割について「ユーモアは単に楽しさをもたらすだけでなく、我々が困難な状況に遭遇したとき困難への支援の効果をもつことが予測される」「ユーモアにより場の雰囲気が和んだり、緊張がほぐれる」と述べている。保育者、特に男性保育者は幼児に怖がられたり、落ち込ませすぎたりしがちな〈問題場面〉で、幼児の不安・恐怖などを解消させているのであろう。

しかし、ユーモアを用いて不安・恐怖を解消することは、ネガティブ事象に対する幼児の認識(反省)を失わせる可能性もある。そこで幼児のネガティブ事象に対する認識を喚起するために、「からかい」によって幼児の

「恥ずかしさ」等の感情を引き出したり、「暴力的な刺激・過激な刺激」によってユーモアの範囲内で「苦痛」を与えることは効果的であると考えられる。〈問題場面〉において攻撃的ユーモア表出が多かったのは、ユーモアの効果によって幼児のネガティブ事象を軽減すること、そして幼児にネガティブ事象を認識させることを両立できるからと考えられる。

男性保育者に対する認識と実際の保育行動

齋藤ら(1998)において、男性保育者は女性保育者から“ダイナミックな遊び”に代表されるような男性的な特性を期待されていた。このような“ダイナミックさ”は、本研究での男性保育者の攻撃的ユーモアにおいて身体的ユーモアが多く用いられていたことに現れていると考えられる。

また、第2観察において男児は男性保育者の身体的ユーモアを多く受けていたといえる。男児が女児より〈問題場面〉(ネガティブ事象)を多く表出する傾向があり、男性保育者はその対処法として身体的ユーモアを多く用いていたことが考えられる。宮本(1993)において男児は男性保育者を厳しく、怖い面もあるが遊んでくると認識していた。事例7のような身体的ユーモアは、それがたとえ〈問題場面〉であっても、幼児にとって男性保育者でなければ味わえないような楽しさも持つ。しかし、本研究では女性保育者のユーモア事例数が少ないため、男性保育者・女性保育者のユーモア行動の内容・対象を比較することは難しい。そのため、幼児の男性保育者・女性保育者に対する認識差の要因として身体的ユーモアがどの程度、重要な役割を持つのかは明らかではない。

まとめ

本研究において、男性保育者はユーモアを多く用いていることが明らかとなった。それによって、幼児は「おもしろい」、「おかしい」という体験をすることになり、男性保育者の存在意義を示している。男性保育者の示すユーモアは幼児の不安やストレスを解消し、円滑な人間関係を築く手段ともなっている。例えば、ちょっと注意されただけで塞ぎ込むような幼児に対しては、男性保育者のユーモアを用いた関わりは有効であろう。

本研究は男性保育者について保育場面の行動観察を行い、ユーモアという視点から男性保育者の特性を明らかにした。本研究の結果は、決して男性・女性の優劣を決めるものではない。人的環境としての男性保育者が幼児の多様性を押し広げる要素を持っているとするならば、保育現場に男性は必要である。また、男性保育者・女性

保育者の違いを見つめなおすことにより、両者にとって、新たな保育の要素を取り入れるためのきっかけとなるだろう。

ネガティブ事象において、どのような場合にユーモア行動が表出され、どのような場合に叱責が表出されるのかなどを明らかにするために、さらに事例を重ねる必要がある。また、男性保育者・女性保育者の違いとして、「叱責」や「言葉遣い」の様式の差異についてもさらに検討していく必要があるだろう。

文 献

牧野幸志 (1997). ユーモア行動の構造に関する研究.

広島大学教育学部紀要第一部 (心理学), 46, 41-48.

McGhee, P. E. (1999). 子どものユーモア—その起源

と発達— (島津和夫, 監訳). 東京: 誠信書房.

(McGhee, P.E. (1979). *Humor: Its origin and development*. New York: W.H. Freeman & Company.)

宮本雄一 (1993). 幼稚園児の認知する男性教師と女性教師. 千葉大学教育学部幼児心理学研究室平成4年度卒業論文 (未公刊)

齋藤政子・木下比呂美・仲山佳秀・林 純一・吉田祐子・小田ひとみ・鈴木弘充 (1998). 男性保育者に関する調査研究(2)—女性保育者を対象とした男性保育者に関する意識調査から—. 湘北短期大学紀要, 19, 47-68.

上野行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について. 社会心理学研究, 7, 112-120.